

11 「私の『法華経』観 —大乘仏教の心」

【全4回】／開催方法：対面併用

たけむら まきお
竹村 牧男

東方学院講師
筑波大学名誉教授
東洋大学名誉教授



受講料 会員料金：¥9,000 早割価格：¥8,000(納入期限：9月30日)

【日程・時間】【全4回】

10月7日(水) 12:30~14:00 / 14:10~15:40

10月8日(木) 10:15~11:45 / 12:30~14:00

■受講に必要なもの

[テキスト] レジユメ配布

大乘仏教の代表的な経典の一つに、『法華経』がある。日本では、聖徳太子の『法華義疏』および最澄の天台宗以降、多くの国民に親しまれている。特に天台宗、法華宗(日蓮宗)は、『法華経』の思想を深く解明し、それを民衆に広めてきた。その哲学的立場は、きわめて高度なものである。

ただ天台教学は、龍樹の『中論』の思想も導入したもので、必ずしも『法華経』そのもののみから構成されたものでもないようである。では、そもそも『法華経』自身には、どういうことが説かれているのであろうか。

そこで今回は、『法華経』の思想を、『法華経』自身に沿って、もう一度、私なりに読み解くことに取り組みたいと思う。

4回の講義の中、第1回は、『法華経』の一乗思想の内容を点検する。そこに仏の熱い大悲の心を見出すことになる。

第2回は、一乗思想の根底にあるべき如来蔵思想が、『法華経』にはどのように現われているのかを点検する。「一切衆生悉有仏性」を説く『涅槃経』と『法華経』とは、どこかで通底しているはずである。

第3回は、仏出世の一大事因縁として、仏知見の開・示・悟・入が説かれるが、その仏知見とは、具体的にどのようなものなのかを探究する。

第4回は、『法華経』において、菩薩道としての修行はどのように説かれているのかを辿り、『法華経』を奉じる者の生き方について考える。その一つの眼目は、忍辱行にあると思われる。

以上は『法華経』のいわば初歩的な理解にとどまるものであるが、その中でも、大乘仏教の崇高な理念を再確認することになるであろう。

【参考書】

はじめての大乘仏教

著者：竹村牧男 出版社：講談社現代新書 出版年：2025